英語授業の楽しさが
望ましい授業の要因に及ぼす影響

（英語授業学研究的視点からのアプローチ）

日本リメディアル教育学会関東甲信支部大会
2013年3月7日　聖学院大学

鈴木政浩（西武文理大学）

パワーポイント資料（本資料）
資料1:「英語授業に関するアンケート調査」質問紙　　資料2:　望ましい英語授業の要因に含まれる質問項目
資料3:参考文献リスト

1

英語授業学研究

「英語授業学」関連研究の経緯　鈴木(2011a:54)より

年	著作等
1983年	若林(1983:186-187)
1984年	若林他共編(1984)
1990年	若林俊輔教授還暦記念論文集編集委員会編(1990) 「第2言語習得理論ではなく徹底して現場的なものを」
1991年	松畑(1991)「名人芸の一般化」
2001年	『「英語教育の推進について」の検討素案』(2001)
2004年	「田辺メモ:大学英語教育の在り方を考える」(報告)
	大学英語教育学会授業学研究委員会発足
2007年	大学英語教育学会授業学研究委員会編著(2007)
2010年	大学英語教育学会第二次授業学研究委員会発足
	山岸・高橋・鈴木編著(2010)

本研究の定義
すぐれた英語授業の枠組み、その枠組みに含まれる項目を明らかにする研究

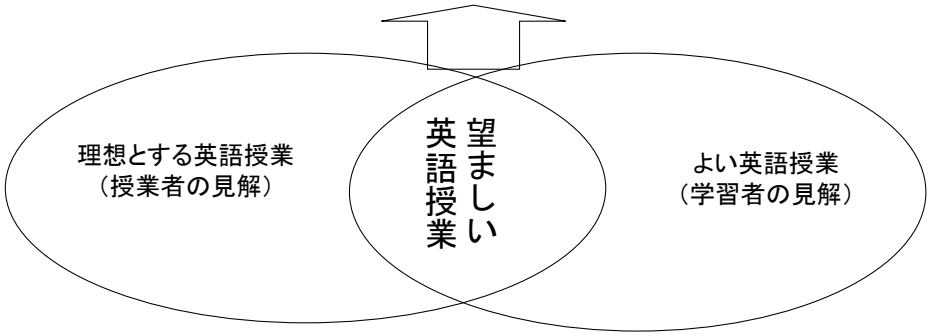
2

本研究のアプローチ

すぐれた英語授業の3側面

理想とする英語授業:	授業者の見解
よい英語授業:	学習者の見解
望ましい英語授業:	理想とする英語授業とよい英語授業の接点もしくは共通点

すぐれた英語授業の枠組と項目



この授業はここがすぐれている → すぐれた授業はこういう要因をふまえている

3

すぐれた英語授業と楽しさの関係

相反する見方

- すぐれた英語授業の要因と楽しさは重なる部分が多い（森住, 1980）

楽しい英語授業は
すぐれた英語授業ではない？

- 楽しさが学力形成につながっていない（斉藤, 2002; 鈴木, 2011）

4

研究の経過

1. 望ましい英語授業に関する質問紙の作成

キーワード抽出と分類
（理想とする英語授業とよい英語授業）　（資料1）

2. 望ましい英語授業の3要因

授業内指向要因・授業外指向要因
（授業成立要因）　鈴木(2013a)

3. 望ましい英語授業と楽しさの関係

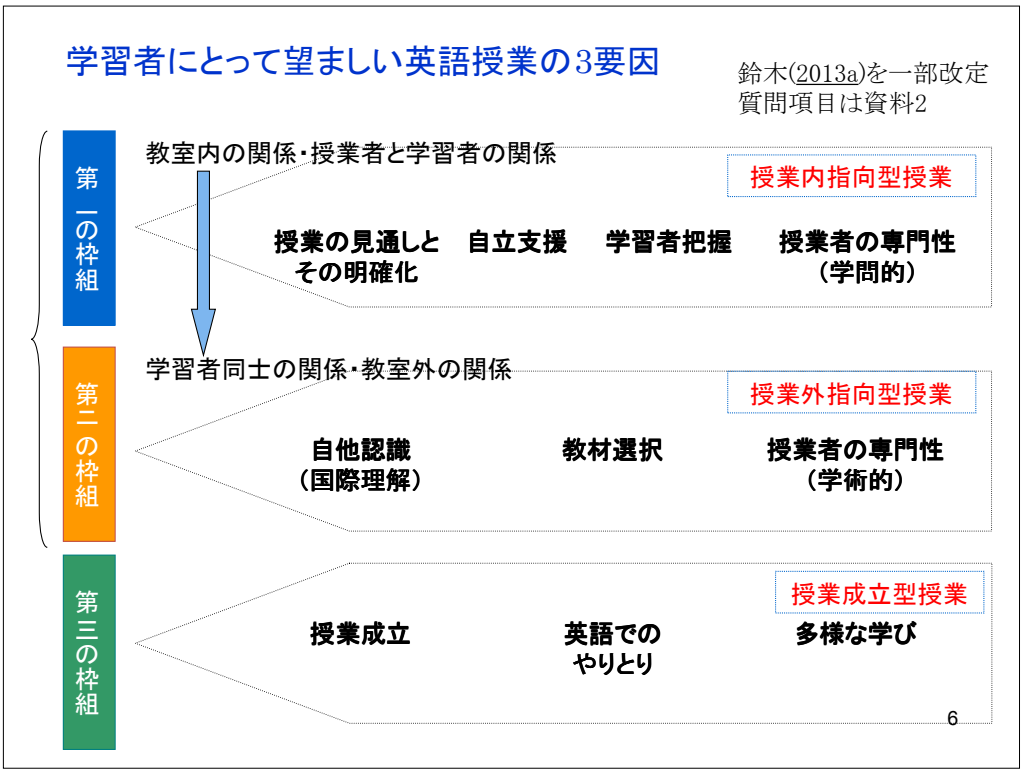
授業内指向型授業は外指向型授業に移行すべき
授業内指向型授業よりも授業外指向型授業の方が楽しさとの関係が強い可能性　鈴木(2013b)

本研究における楽しさ
→過去に受けた、もしくは今受けている授業に対する漠然とした印象。

5

「英語の授業は楽しいと」　思う　6・5・4・3・2・1　思わない

授業者と学習者（教室内）の関係から学習者同士さらに外の世界や社会への認識へと授業が広がりを見せる必要性から。



(1)授業内指向要因：シラバスや年間計画などの見通しを示す、周到な事前準備を行う、学習者に対する学力状況の把握や、学習者の反応および考え方への理解を示す、受験や就職に加え、学習者の将来を見据えるなど学習の目的をふまえ、予習、復習、辞書の引き方など自律した学習ができる授業に関する項目から構成される要因

(2)授業外指向要因：教室内のやりとりを教室外の世界につなげる、お互いの考え方を交流し合うとともに、教材を通じて社会や世界に起こっている諸問題を学ぶ、国際理解や異文化理解に対する認識を深めるような授業に関する項目から構成される要因

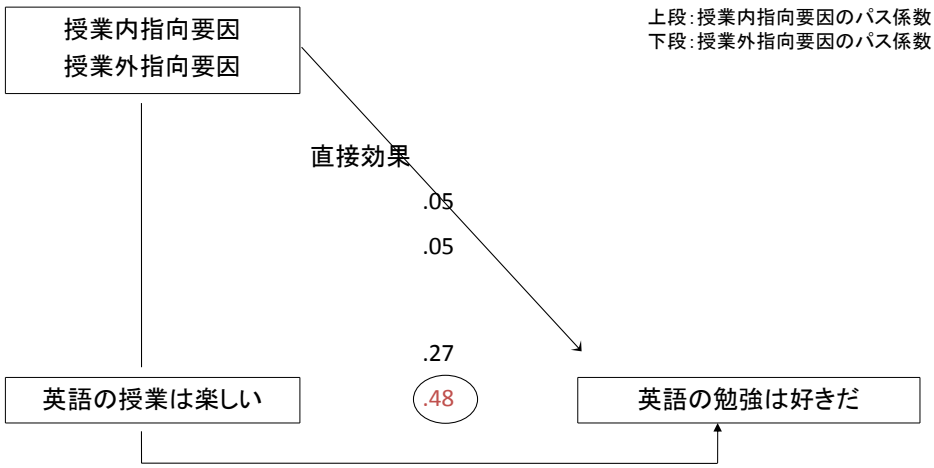
(3)授業成立要因：比較的一般的に見受けられる授業、授業成立の要件や多様な学び、英語によるコミュニケーションの関わる授業に関する項目から構成される要因（本研究では割愛）

楽しさを仲介した直接効果と間接効果

間接効果の係数の方が若干高い
→楽しさを経由した方が「好き」につながりやすい

鈴木(2013b)を簡略化

上段：授業内指向要因のパス係数
下段：授業外指向要因のパス係数



間接効果（楽しさを経由した際のパス係数）

7

研究の目的

1.授業内指向型授業が実際に授業外指向型授業へと移行していくものであると学習者はとらえているのかどうか（モデル1）

2.移行にあたり、楽しさがどの程度影響を持つのか（モデル2）

8

方法と手続き

方法

鈴木(2013a) の質問紙調査で得たデータから2つのモデルを作成し共分散構造分析により分析する（Amos ver.17）。

対象者

関東近県の中高大学生1459名（中学生676名、高校生381名、大学生402名）。

調査期間

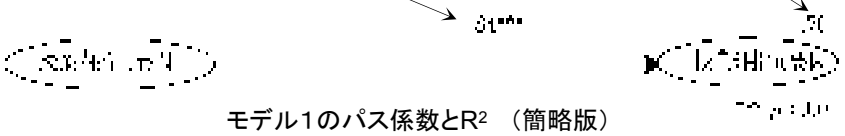
調査実施期間は2012年1月から3月。

9

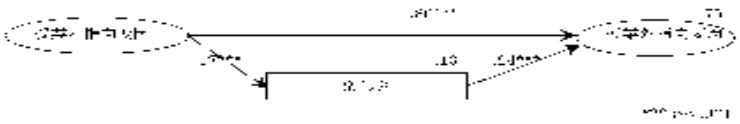
結果

授業内指向要因が授業外指向要因のおよそ70%を説明

パス係数の値が大きい→与える影響が強い



モデル1のパス係数とR² （簡略版）



モデル2のパス係数とR² （簡略版）

モデルの適合度

	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
モデル1	.747	.719	.857	.078	2998.71
モデル2	.744	.717	.855	.077	3086.49

10

GFI, AGFI,CFIは.90以上で良好（ただし、GFI > AGFI）。
RMSEAは.05以下で良好、.10より小さければ許容範囲。
AICは複数のモデルを比べる際、数値が小さいほどモデルの当てはまりがよい。

ただし、自由度が多いモデルはGFI, AGFI,CFIが下がる傾向にあるため許容範囲内とみなす

考察

1.授業内指向型授業が授業外指向型授業の成立を促進する（移行していくべき）

2.楽しさの影響は強くない

可能性1：　楽しさと望ましい英語授業の要因とは別物である
現在行われている授業の楽しさは、望ましい英語授業の要因とは別の次元で進んでいる

可能性2：　楽しさが望ましい英語授業の要因に含まれる可能性
学習者が考える楽しさの要因と望ましい英語授業の要因に共通点が認められる

楽しさの要因：漠然とした印象ではなく、質問紙調査の結果抽出された要因
（鈴木, 2012）

11

楽しさが関与しない2つの可能性(1)

望ましい英語授業の要因　⊇　楽しさの要因

望ましい英語授業の要因	楽しさの要因
授業内指向要因	
・学習者自立支援	熟達要因
・学習者把握	安心参加と理解要因
・授業者の学問的専門性	安心参加と理解要因・熟達要因
授業外指向要因	
・自他認識・国際理解	参加表現要因・教科書外要因
・教材選択の視点	教科書外要因
・授業者の学術的専門性	教科書外要因

共通点

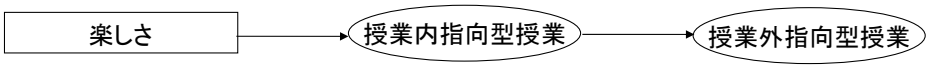
楽しさの要因は望ましい英語授業に内包？　別物？

12

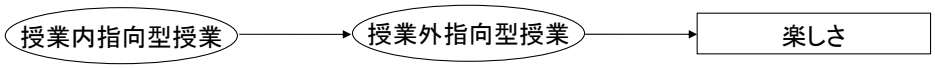
楽しさが関与しない2つの可能性(2)

望ましい英語授業の要因　≠　楽しさの要因

入口にある楽しさ



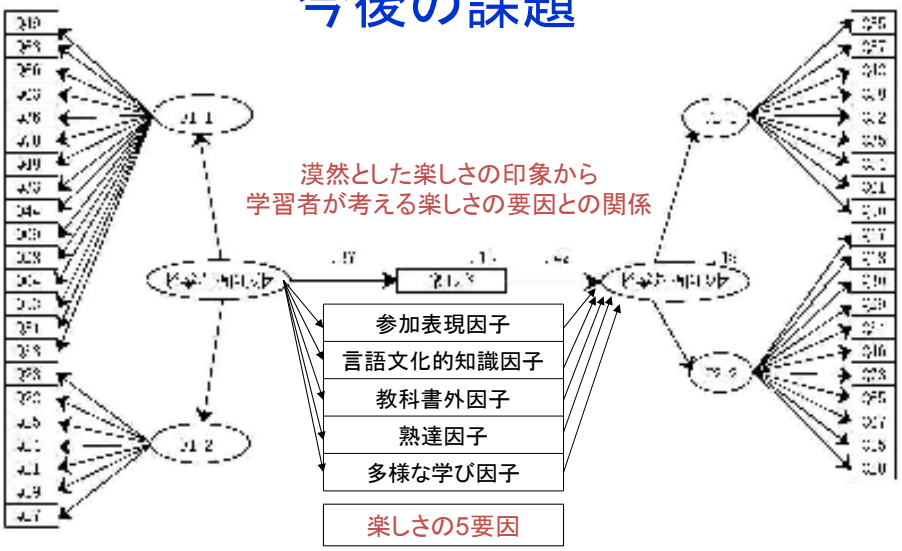
出口にある楽しさ（佐藤, 2012）



13

今後の課題

漠然とした楽しさの印象から
学習者が考える楽しさの要因との関係



学齢（中高大）による違い
望ましい英語授業の要因と楽しさの要因の関係

14